

韻報

第 二 冊



學習院籃球俱樂部



部報オニ号目次

半歳回顧

リーグ戦を終つて

部についての雜観

諏訪 合宿日誌あり

部に対する考え

勝負について

四七年度高校リーグを顧みて

五回附録戦後感

高等科のコースをするにあたって

中寮科の指導方針

老猿先生献巻記

昭和十六年度戦績

大塚洋三

堀込大

陣田誠彦

任藤隆彦

坂口知夫

名保功房

宮田誠太

牧志勇

上原善三

坂口知夫

老猿先生

一

三

四

四

六

七

九

十

十二

十三

十四

十七

半歳回顧

大塚洋三

既にハニノくとも、この半年の間、私は如何なる事もなして、夢みぬいた。この半年の間、私は如何なる事もなして、夢みぬいた。

我は、この半年の間、如何なる事もなして、夢みぬいた。この半年の間、私は如何なる事もなして、夢みぬいた。

我は、この半年の間、如何なる事もなして、夢みぬいた。この半年の間、私は如何なる事もなして、夢みぬいた。

誰れも去つてしまつたのだ。でも、誰れも去らない一戦だつた。近頃の木の敗北だつた。この時、我は、今思ひ出して、もバ好いもを感ずる。だが、この一戦に破れたことが、我々のそれまでの自信を打砕つてしまつた。最後の試合の青空の一戦は、全く予じめな敗北を喫した。自分でも思ひがけない程の大差で敗けたのだ。この水な人は、自分自身の結果をあり、そんな反撃は、その後の試合では、たことがなかつた。

今思つても残念な事は、我々の実力が複雑な一戦で、膠着点に落ちたのではなかつたかと思ふことである。そのことは次の関東学生選手権を通じて更に明白になつた。何が知りぬれ持のマンで、ある丸い荷の中をぐるぐる廻転してなる様な気がして、なになかつた。それが何によるかを解明しようと思つたが、結局、練習方法か、練習態度か、その二番の中のいづれかによるにちがいないとの結論に達した。そして、この水がチームの進歩を妨むものであると確信し、これを一掃して、より以上の進歩を計る為、万難を排しても、夏の合宿を行ひ、この合宿を行ひ、この合宿にすべへの期待をかけたのである。その準備に万全を盡し、進軍を覚悟して、積極的に行つた。その結果、チーム外の諸氏にまで御迷惑をかけた。チーム内でも、キーパー以外のプレイヤーまでも動員してしまつた。この事は、今改めて相済まんことをしたと思つてみる。

この合宿は、使がたきえて再び、大学チームよりも高専のチームのみに好評集をもたせようであった。大田は高専よりも高専の部員の方が多かつたことをみて判る。大学部員には参加できなかった者が多く、おまけに、自分自身さへ、よんどころないことで合宿中途で抜けぬはなげなかつた。この旅に前期の目的をどの程度まで達したか、判りぬまゝに、四大学リーグへの練習を開始し、秋のリーグの準備として、目的で、四大学リーグ戦に突入したのである。成城、武蔵、成蹊を経るべく一蹴して、昨年に引続いて二連覇した。このリーグをみて、合宿の目的は一大部分が達成して、旅に思はれ、安心したのであつたが……

この四大学で、主将を違さ、フリーな立場にかえつた。そして、全くの傍観者になつてしまつた。秋のリーグ戦も、合宿でもあり、傍観者でもある、徹底的な立場で送つたが、結局、春のリーグの神妙にある……すこしも精神的に……ではないかと思つてなげなかつた。だが、今くとも四大学リーグまでの間は無我夢中のバスケット生活で送つた。感無量なものである。自分自身としては、大田で開きかけた花は、四大学リーグから深く散つたのだと思つてゐる。

——自分自身として——

春休み、大田の里にいゝた

花は散りけり、悔ひを感して

——チームとして——リーグ戦

春休み、大田の里にいゝた

花は散りけり、悔ひを感して



リーグ戦を終つて 堀里次

春のリーグ戦に敗れて以来、我々はこの年のリーグ戦の後
勝を自ラレヌ合宿もレ又九月学校が始まつてかりも練習もレ
て来た筈だつた。それにも拘らずも宛のないあの戦は取り一
件とヨレたといふ事もあるが、我々は今以上に一人一人
が、教へて自己修練と、リーグ戦の一戦々々を、又練習と
又練習せねばならぬ。

とすオード、我々はト一戦に處かゝつたので、相人と
しての欠点、かゝつた。我々の練習の目的は、我々の練習を
あつた、我々の練習の目的は、我々の練習を

我々の練習の目的は、我々の練習を

我々の練習の目的は、我々の練習を

我々の練習の目的は、我々の練習を

我々の練習の目的は、我々の練習を

我々の練習の目的は、我々の練習を

み、決勝戦の勝敗といふ結果にふつてしまつた。

聖書の像求との試合は、我々の勝敗の結果、極度に自信を失

ひ、我々の練習をスリットで取れ去り、最終通過立ち通る事が

出来ず、練習戦も、あの勝敗の結果、我々の練習を

できなくして、我々の練習を

なにも、我々の練習を

その目的の一つには、我々の練習を

たので、我々の練習を

るが、我々の練習を

んをやつたといふ事、我々の練習を

ける所があつたといふ事、我々の練習を

口になつてしまふが、我々の練習を

我々の練習の目的は、我々の練習を

が、我々のチームは我々一人々々のアトリーヤーのものであると云ふ事を認識すべきである、と同時にアトリーヤーを擁護してゐるアトリーヤー全作のものであると云ふ事も忘れてはならない。アトリーヤーを擁護して見ても反省せぬは好まない点では余は遺憾があるけれども、その点は今後部員全作で一語に考へて行く事にして、ここでは以上三つの事について述べた。最後に部員諸君の奮進と奮闘の御指導と御援助をお願ひ致します。

— 二六二— 三五記 —



部についての雑観

浪田初彦

部といふものは狭義則同好会といふものと思はれがちであるが、性質は異つてゐる。前者は単なる飲饌を旨として好きな者が集つてアトリーヤーを愛し楽しむた趣な近代的な社会を基底的要素と持つてゐるものであるが、これに反して部は団結を最も尊ぶる。自分の自由を犠牲し水とへもする社会集団である。そしてその矛盾を即ち吾人の自由と部に入つてゐる為に起る矛盾を如何に調和させていくかが今後部に残された一番大きな課題であると思ふ。

秋期

合宿自説より

八月八日 秋期合宿
 午後八時集合、合宿の用意は概シ水田部四時前、
 十三時廿五分集合、先導の上原信之介、牧岡
 宗彦に迎え、水田宗彦さんのお宅に行き、しばらくして
 夕方天下の暑熱がなほ八時で上原信之介、牧岡
 宗彦、水田宗彦、水田宗彦、水田宗彦、水田宗彦、水田宗彦、
 物の整理後四時集合、コートを脱ぎ、フットボールの練習
 共進館に長く、走るとの練習も有り、水田宗彦、水田宗彦、
 は極めて良い、先のは、水田宗彦、水田宗彦、水田宗彦、
 も居た、慶応の練習が長引いて、水田宗彦、水田宗彦、
 は五時半過ぎであつた。――

練習の終わったのは八時少し前、水田宗彦、水田宗彦、
 する。帰途温泉に入り夕食の時に、水田宗彦、水田宗彦、
 焼、水田宗彦、水田宗彦、水田宗彦、水田宗彦、水田宗彦、
 あり、就寝は十一時に進かつた、水田宗彦、水田宗彦、
 使用で夜明けの練習時間、朝早く起き、水田宗彦、水田宗彦、
 何とかCONDITIONを調整して、水田宗彦、水田宗彦、
 温泉地特有の熱さを身にシフト、合宿が一段も進む。

T.S.

この部をも団結を必要としないう部は存在しない。が、ピンポンニス等も異つて殊に、筆談は割合少人数のチームプレイであるが運動の中でも最も団結の必要な部の一つである。と云つても過言ではあるまい。此のチームワークを固める為に合宿、ミーティング等は主に行はれるものと思ふ。而るに現在筆談部はこの可レンマに落ち入つてゐる。外面は元来程目立たないが、試合をやつて見るとそれが明らかとなる。

時にはよくまとまることがあるが、練習にぶつかると簡単にチームがばば／＼になつてしまふ。部員は計りださぬ五名の部であるが、情が力し、自分勝手なことをして、皆の了解を得ればチームワークが取れるのもさうでもない。レカレ一旦物事が決まれば部に入つてゐる以上、多少自分が必要としてしようがなく、その水に任せていかなければならない、チームワークがよくとれる部になると、レイをやつていても楽しいし、練習のよゝい試合がマホスし自然に部としても強くなるのである。

又、学校のチームは自分のチームである。所謂、お坊ちや、チームである。従つて競争がくずれると団結もくずれ、フアイトも精神的に人的になつて競争的にならず、ふじめな敗北もある。フアイトと云つても余り強が分燃やし過ぎるのには考へものがある。何故なら学校のチームにとつて、もしその部



合宿日記より

×月×日 午後

昨夜の夕五から大分冷えた。レカレ長く眠れた。昨夜寝る前にヒイ／＼云いながらマツサージしたので、水不足も痛くなく身つた。大時起床、七時五十分起床、トロー、意気が早目に来たので練習を早目に終え、小さなコートの方でテストを行い十一時頃練習終了、一寸(は)つた。

南屋へ帰つても皆ごろ／＼、風呂場を洗濯に使つてゐるとヤダ、怪も流さない。

昼飲 チーフとジマカイモとでかい豆にふつたいんげんとを煮込んだものだけ、(御殿場も田向合宿を通して、

見ても一番がどいように思いますが) 坂口、
午後

一時半頃の通り出発した、合宿も今日で四日目、皆大分へばつたらしくコートと逆の靴履がふ／＼に重つた(他の人は別がないが私はさうであつた)。いつもに習つて練習後に体重測定練習日は美白と大塚同じ、コートよりの脇腹足が痛くてまは、靴履をやめたかつたが痛もさうらしいので、まはした靴履についてまはつた。又明日の練習

な時に泣くともその感動が余りにも大きければ。学校々々
△は自分の手いムでもよい。それならばそれで一層チームワ
ークが必事となる。気分があつた時は思ひがけなく良い試合
をするという熱意を生かして、試合に臨むのよしんば強いク
ムに守つても決してムレぬめを争はずすまい。

次に依方と人集の不度とあるが、これをどうせよと論議すく
も治まらない。傳うも人集は今度自分達にけを争つて出来る
自題ではない。そこで先アカーン、チーム、ク、の、を、か
つて良い部と育と、い、こうでははない。

吾に對する考

第二 僕と僕達

考えてみると、僕は今迄たつた独りで歩いて来た感じがあ
る。ただ考々自分以外は何も知らなかつた。このまゝでいつ
たか心の中まで、バサ／＼に乾いてしまつたのであらう。わか
直へ、それではまあとも思つた。やり切れぬので一日
一日を退つていたのだが、そのうちに、自分が何かを求めて
いるのに気がついた。管球部に入らうとした動機もここにあ
る。しかし、始めのうちほどはどうしてその気になじめず、
とまどいしてしまつた。そして部生活そのものも、ゆつくり
歩いていたものにとつては、単にボールを運つて定つてある
のに過ぎないと思われた。

習生と云ふと、爪つと云ふところではない。式種も時内に
なつても目立ちず、外見が美しい。

K.N.

X.Y.X.Y

今日は一日練習がない。丸の口の公園のバスで上野訪に行
く、直ちに自由解散。バスに変わるもの、パナソニックに入
るもの等あり、一二、三や人のバスで帰る、高野科は五六
人の同窓生の列車で帰る。鈴木先生、堀、牧、僕、四名
は勇躍退席して飯等を送る。長い間練習生活と云ふにして
来た高野科の諸君、特に僕にとつては毎日行き来たしま
く協力してくれた羽佐田と別水君の感慨の深いものがあ
つた。勇躍退席高野科の御宅に行く。上原さん、御宅が
来られてお持ちする、すぐめ分れるまゝに夕食御馳走にな
る……

十時半帰部舎、留守番組はその間映画を見る行つて居た、
彼らは全裸で腹と見え我々の食を乞れが持つて来てせま
甲分ホてしまった。

T.S.

芝草ながら此処で、合宿中色々お世話になりました皆様に
厚く御礼申し上げます。

部長一同

練習にも一向に熱意が湧かず、ヒツ戻れて家に帰ると、そのまゝ寝床へもぐり込んだ。

生活がまた全くの单调さのうちに、カラ／＼と空しい音を立て、空廻りをし始めた。バカ／＼とくして任侠がなかった。

もつともラレい口実を作つては、練習をすつた。部費をはたして払うまいと決心し、いやそれどころではない。部費なんかやめてしまおうと思つた。この様な不満を控まながら、

その水を口に云い出せないままに練習にかり出されていった。ボールを蹴つていても、いつも何かほかの事を考へていた。こゝに近づいた附屬戦ノ、シーンのかりだがしるの覚え、何もかも忘れて練習に打ち込んだ。始めて獲物的にボールを蹴つたのである。フヤろろカシと云う気種えが部費の向に盛り

とり、固くすつまが結ばれた。この附屬戦に大敗を喫したが、土を払つて立ち上る事が出来た。その夜に鏡に練習にも以ての様な身持はなくなつて部生活が日常生活の中へ滑り込んで来た。お互いの通符が合うのは大さな強みである。今しもどつと元気のよい葉が湧きあがった。此の様なアットホーム

の暖かさうちに僕は今まで何を求めていたか？ それで部生活の意義は果して何か？ ということがはつきりと判つてくる様な気がする。

勝敗について

坂口知夫

最近ベストプレーでもその端に名を連ねた将棋の木村誠棋名人の書いた勝敗の世界を云うべき、将棋好きの兄がかりて目を通した。その本には、木村名人が現在の名人位を得る迄の経路たる勝敗の世界を通して勝敗の様相を描いているのである。勝敗の世界それは将棋だけの世界ではない。今者々がやっているバスケットだつてさういふ世界なのだ。僕がバスケットをやりに始めてからもう五年になる、その間には随分試合もして勝ちも負けもした。勝つて嬉しかった試合、負けて悲しかった試合、又その反面、勝つても一寸も嬉しくない試合、負けても何となく嬉しかった試合、思い出せばいろいろである。これは當りかたの話ののだが、試合をやれば必ずどつちかが勝ちどつちかが負け、その勝敗の差が例え一点であつても二点であつたらが勝つたには違ひないし、負けたのも又違ひないのである。そんな事を考へながら、木村名人の勝敗の世界を讀んでバスケットに通ずるものを何か書いて見ようと思ふ。

名人は相手を負かす為には技術と精神力であると言ふ。勿論勝敗には運があるけれど名人は「運は意味を云へば、偶然たる運云うものは、そう減りたあるものではない。少くとも技術と主体とする将棋の世界では……」と言ふ。

勝敗に因しては選などと云うものは殆んど無視してよいのでは無いだろうか、一点見落していかたいムアツテそのシエトが情しい時ではづれてしまった、そして負けた、それは選が悪かったとも云えるかも知れない、しかしそれ以上にシエトの技術の善悪も云うことも考えられることだ。人間は神様では無い、ミスもあり得るたゞそのミスを選が悪かつたと云ふことだけではづけることは考へるべきことだと思ふ。もう少し勝ち高いくつたかもう少し本意も違つて敗つたか入つたかやないかと云ふことは例え人が選と云うもので出来てしまつても心の中で考へるべきことだと思ふ。

この様に選と殆んど無視してよいものとすれば確かに勝敗は技術と体力と精神方に在るとされる、その内、技術と体力は練習中の習力に得られ、試合中にそれ以上のものは求められないと結果してどんなものなのだろうか、或は試合をして精神力と云うものをたゞ選の方うくと云う外に何かのフアイトのように思つてゐる。少し強い相手に対する時少し勝つたからまいせ、その時には全力を振つたが勝つてゐるやないかと考へる程だ、意気込みは大抵持つてゐるのだが、たゞ勝つたんだ勝つたんだ選がなまや駄目だぞ、と云う時は人と魂的精神力は試合の始めのくべり出しの意気込みで果外筋力物いものなのだ。この精神力にフリて名人は精神力は技術と体

が最も重要で選と、此消彼された後でなければ、選に出るまでものでは無い。それが最初が分つて後立つと思ふのは誤解である、将棋が云ふはもう時間も無い、敵にやつて作力が悪く同僚との戦に達したと云う状態が双方に来た時に始めて精神力が簡単に云へば選取りの利が最後の勝利を得るのである、この精神力とは先んずから決つてた選の初めをえすれば例にても勝つと云う條件的なものではないと思ふ、選するにたゞ勝つと云ふことよりもまづないことが選かまいせと云う自己の力を知つてゐる意気込みの方がより強い精神力と云へるものではなからぬか、この精神力を一人一人が持つことによつて将棋の二対一の勝負の選はたゞでは無い、五対五のバスケットの勝負の選も同じで選はる精神力の選、即ちチームワークが在るに在るのではないだろうか。

最後に試合に臨む態度として名人は、私は常々棋士の対面に対する心構へは、武士の戦場に臨むと同じであるべきでありまた一局としておだや疎かに指した覚えはない、しかし対局の大小によつて気持が變つて来る、そしてその気持の為に成功することもあるがその為に却つて失敗することもある結局理想としてはどんな相手に對しても同じ姿勢、同じ態度を對するべきだとおだや生身人間としてなかくそこに選選し得ないのを欲している。これは吾々として常に考へさせられることである、相手が強かろうが弱かろうが試合をやつてゐると一生懸命にやることはやるのだがどうもそれがあつて

中になり易く自分の力を加つた金銀のありやうに勝つては、
 の半分は大凡と云ふ程に勝つては、勝つては、勝つては、
 勝ち負けのにも勝つては、勝つては、勝つては、
 局外の精神力の向題に移つてしまふのだが自分を見つめ
 そのためには自分の力を或程度知ることではないかと思ふ。それ
 又相手の強弱に拘り不常に全力を尽すことが大切であると思ふ
 将棋の本村名人の言葉を一寸失敬して僕がバスケットをやつ

ては、勝つては、勝つては、勝つては、
 勝利の世界は、勝利の世界は、勝利の世界は、
 うるさかの世界が完全に合理的にされてゐるといふことだ、その世界に自分
 行くナールとて勝つては、勝つては、勝つては、
 うるさかの世界が完全に合理的にされてゐるといふことだ、その世界に自分
 のかほは、うらうら

旧七年制高橋リック戦を顧みて

久保 玲 少

先達等は、このリック戦後の我々が以後に
 比べつて変化してゐるのを感じていられるだま
 う、其の通り、我々は変化してゐる。

一ヶ戦後の動きを才三郎の足場が分ると思ふ
 ると、四つの相子校がうるさかの長所を併せるとは
 それを学ぼうとするといふことだ。大変好
 りは傾向だと思ふ、只それが何故か、又夏は
 に終らないように。あつても夏生活には、
 習習カラ！と云うものが存する。夏生活であ
 り、

抑止にも致水、コ大した事はない人の威感に
 も生算されて、全、
 だが、今までの試合、
 云う意味が言まうと、
 より負け続けたのだ、
 瘦となるのではない、
 水が分はるの必要はない、

四角形つては、この流にして、
 うるさかのドクンましよう。佐野に引つぱられて
 去年の十月。その頃は、
 見えたもので、
 だ、
 た、
 た、
 た、

バスケットだけにやっていたのでは凡そ味の無いものになつてしまふでしよう。従つて先水に潤も持たずには部活動(試合など)は裏味の違つた。まもつと然んにするのが一番の方だと思ひます。ところが委員長とか、会討委員とか、特定の人物だけが部を構成してゐるのではない事は誰も承知の事なのではないやま行とすると、やはり二三の者だけになつてしまふのです。何か一つの事に責任を委ねられると、始りの内は反省でも時が至つてつれづれの信事に興味と愛情をも感れ出し、それに情熱を打込め採らるゝのが正常な放行ではないでしょうか。ですから各部長が一人も欠けること無く、部生活の楽しさを満喫する事の出来るような方向に進めるのが、これかかたの苦難だと思つてゐます。まよまりのつかない事を書きましたから、海軍に読み方を要して即精読下さい。

才又四附属戦後感

—宮田 誠太—

昨年のチームは三年生中心であつたが、今年になつて二年生中心のチームへと変わった。このことは特に専科兼球部にとつては大きな痛手であつた。何故ならば、附属戦を直前に控えて練習する時間も少なかつたし、一つのまとまつたチームとして、この二年中心のチームがやつと澤を整理始めたのが附属戦の直前であつたからである。勿論球部の附属戦が終つてから事実上は二年生(当時)は一年生が高等科の部としてその中心とはなつたが、次々チームの中心になつたとは思われなかつた。専科のチームはしばらくの間、彼等には意欲状態であつた。その間の練習も振れなかつた。それでも尚もななく復舊した。しかしそのときには余りに進歩がなかつた。この場合にしてもそれがあつたのかも知れない。新しいチームであつたからチームワークがなかつた。これは練習不足に原因がはじめてだという者であつたから、大部会が固まるのであろう。異力も、昨年の附属戦時、若ば、それほども積層的になれなかつたのは分に比較して強かに劣つていたし、体力的にもつともだともいえる。

中等科の指導方針

坂口知夫

去年今年と僕が中等科の面倒を見始めてから二年になろうとしている。去年三年生でチームの主体となつていた寛志、竹原君、毛利君は今、高等科チームの中で活躍している。一年生で夏休み

の練習の帰りにアイスクリームを何本もおいしそうに食べていた柳登君が今では中等科チームの中心となつて大分活躍するようになった。こんなことを考へて見るに、この中等科の年頃と云うのは、どんく、空つていくものと驚かされるを得ない。そしてそれにつれてバスケットでも若し適當な指導が得られればそんな驚くような進歩をすることは

ないかと思ふのだが、なかく、うまく行かない。全く教えるところの難しさをしみじみ感じさせられた。

現在中等科チームの主体は二年一年と練習は約十五名、練習は週に三日程度、その外は行けるのは、大学の練習の關係と週一回の二回行けるかどうかで、折角練習の時間をとるも、思

う稼に行かすまで感かのかバスケットの教も出てい

ない。先日行はれた初めての附屬戦にしろも、どうい

い目に見ても惨敗だった。その点でももうと指導に当つて身を入れなくてはと思つてい

る。三年生がいなくて二年生が最上級生であるものに、来年もこのチームのメンバーが定かなくなつて、

とは最も強味で今後のやり方如何ではかなりの成績が上げられるのでは、いかと心算かに頼っているわけである。

初等科を出たばかりでやつとバスケットボールを扱えられようなのが何時の向にかバスケットの練習になつてよるうには思ふからに深しい、レがレ、

余りせいバスケットの型にはほめたくない、のびく、

とした明細な近代的なバスケットをやさせたいのだ。最近に常に練習の援助をして下さる池田君、その他の方々、特に感謝し同時に中等科諸君の努力を望んで止まない。

二六、七、十一記

「あそ二回いけないうら

レしようではないか」とか、

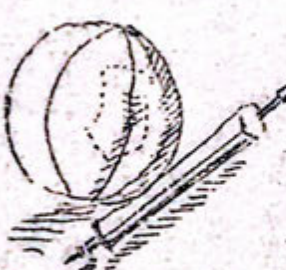
自分達で反省をし、又、明

るに、深い練習が出来ると

らに、皆で考へ、努力して

感れいと思ふ。

コーチとして我々は、多分



二六、十一、十五記

老猿先生新辯記

何？私にコーチ論をしゃべれ？ とんでもない、とてもとてもそんな苦しいことは出来ませんよ。経験者でも知らないのですか？ それならば、それについては何れと愉快なことや、辛いことがありましたか？、思ひ出さずにしゃべりませう。まあ、要は支持で、お茶をのみ、お菓子をつまみながついて下さい。

そもく私が一番最初にコーチの差教をしたのは、終戦の翌年の昭和二十一年の秋、いや夏でした。當時はまだ、旧制の学制で、女子高校はなく、高等女学校と云つてました。その女子校の試合だけの、しかもたった一試合だけの確はベンチをしたのです。その後は、今みたいなオーガンではなく、一部二部と区別され、リーグ戦をやり、入替戦をやったのです。たまく私のみたチームが四部で優勝し、三部の最下位と入替戦をやつたのですが、その入替戦をベンチしたのです。その頃の私のバスケワットについての知識は、バスケにまでゆかず、バカバスの程度で、ボールを持つて歩いては行けない、ドリブルをやめてボールを持つたら二足のドリ

ブルをしてはいけないと云ふことが判つた程度で、ブレイク・ランの動作やゾーンの決め方などは、私の知識が云ふと雲上のことでした。

それにも拘らず勝を本心と叩いて引受けたのですから厚顔らしいこと、この上なく、今から思つても腹が痛くなりますよ。で、その時、私が試合前に何を云つたか云うと、勝つなさい。敗者は最善の防禦です。敵がボールをもちたが、それに気が下つても投中してはいけません。ボールをこつちがもちたが、決まらだけ敵に運寄らず逃がさない。それと選中分れなく持つたら速くに入る味方にパスして、敵のみなはよくあいてる所に動くなさい。オポガードは走らうな距離で投中力以外は絶対投中してはいけません。どうですか？ 今から考えるとこれはオールアタックのストリーミングですよ。その結果？ 負けました。ベンチから見て、無知無んで言から勝てるわけありませんよ。でもこの時以来、必要は最善の防禦であるとの考へ方をもち、その考へだけは変りませんね。そして、この確はベンチが私のコーチへの関心を深めた理由の第一のものとなりました。失敗は成功の因と云ひますが全く本當です。

次に私が確はれじやないコーチになつたのは、昭和二十二年の冬でした。しかも、旧制の高等女学校の低学年へ三年以下へのコーチでした。これを引受けた動機？ それはずい達と遊ばたからですよ。生来子供好きでしたからね。でも、この時に低学年大会があつて、その一回戦でジャンマウでしたが、その時の失敗の理由は、練習なんか全くやらずブレイク・ランはそれとしてやつただけです。この時に、もつと一変した

ものをしなければいけないと知ったのですよ。そして、この手
違が卒業する時に必ず優勝の喜びを持たせようとの望みをもつ
たのです。それ以来、今日までフーケをやつてゐるのです。

この時々々練習を何人技術の基礎練習一にしました。それ
で、勝つことを考へる様になりました。そしてフーケをする時に
フスホーツをやる者の最大の喜びはフスホーツを撃しむことであ
り、フスホーツを撃しむ最大のものは、試合に勝つた時の気持ちだ
です。フスホーツは勝敗の為にやるのではないが、やるか否には勝つ方
方が楽しいに決つてゐる。だがその前に忘れてはならないこと
は、皆で、共に苦しみ、且、共に楽しむことを喜びとしてむら
いたい。と云ふことを強調してやりました。そして、望む練習は
体が強くない代りにチームワークはとれない、苦しい練習はそ
の一人だけが苦しいのではなく、皆苦しいのだ、その苦しい
時にお互いにはげまし合つてこそ、カソウリしたチームワーク
が生れ、そのやうに皆で苦しみは堪へることを喜びと感ずる様
じやなければいけないとの考へを強く練りなりました。これは
が、それ以来のフーケ方法に現はれて、女の子としては現れに
キツイ練習をやらせました。その反面で心配をうけたのは健康で
したね。これには全く気をつかいましたよ。そして、そのこと
を考へてとつた練習法が隔日定期練習です。女子の場合には、
(健康と練習量から云つて)週三日が限度です。それが偏らず

に平均する為にはどうしても、毎週隔日に三回やるのが適当だと思ひ
ました。このことはよつほどのことがない限り変更しない様にやつて
きました。他の学校等では、試合後になると果つてやるけど、それ以
外の時は果りが悪いとか、よく聞きますが、これはフスホーツをやるま
旨にも反するし、余り好いことじやない様です。大会で接戦の時に勝
敗の鍵になるのは結局練習量でせう。試合だからと練習をやめてや
つても練習量にはならず、効果は少しです。むしろ健康を害する弊が多
くなるのではないですかね。

私がそれ以後にとつた方法？ え、それ以来練習計画と計算をす
ることになりました。計画はすべて計算の上に成立つのです。計算と云
ふ言葉は特に使ふとおかしいかも知れませんが、一般に大会に備へ
て練習計画を樹てる時は、大会まで後何ヶ月とは云ひませんが、何回の
練習が出来るかと云ふことを口にする人は少ないと思ひます。これが実
際上どれだけ練習をもちたらずか判りません。私はこれで大失敗をした
ことがあります。大会までの期間が長ければ長い程、この計算はむづ
かしいのです。高校以下みたいに大会と大会の期間が短いと、これは
余り向題になりませんが、大学等はこの点ではこの計算がむづかしい
のです。この計算によつて計画が樹立されたならば、よん所ない限り
この計画は変更するべきではありません。特に最近の様にアメリカ流の
バスケットが入つてくる様になると、流行品と同様に技術も変つてしま
う。その変化は契にめま著しい程です。こうゆう時程、この計画は使

重に樹て、決めた以上は、よかれ、あれかれ、確實に実行すべきです。これを途中で変更するとプレイヤーは全く困ります。一寸も入らなさんなさい。パスを右にせよと云われれば、途中で、左にせよ、これが新技術だと云われれば、それがすぐに変へられませんか？ 技術的に全く不可能です。フォーテはプレイヤーに対して常に一貫したものを示すべきでせうね。それを徹底させるべきです。

現在の一端強いと云われるチームを見ればそれは判ります。豊彦早稲田、近藤等、いづれも獲得の戦術を持っています。そりや時代の變化によつて、両手のシートが左手になり、スエアの踏み方が変わるのと云ふ点はありませんが、大凡の一貫したものを保持してゐます。逆に云ふならばそりやゆり点に缺けてるチーム、つまり、時代の流によつてその時々のやり方の違ふチームの模倣歩しないと云へるでせう。

このうでで少し話題を変へませう。私はね、フォーテするのに感情を出して失敗しましたよ。部員が十九人ゐたのですが、それを平身に出場させたのです。一試合に十九人を全量出場させ、二十点以上リードしてたのが見事に大敗しました。やはり、これは私が皆一語に練習したのだからと思つてやったのが失敗の原因ですね。でも、ここで考へるのです、練習の時は全量をフルにやせざるべきで、試合こそ送ばれた河人か、やる方が効果的でせうが、練習の時はやはり、ごく保守的を考へてやうせざるべきです。レギュラーは新人

だでは、チーム全体の向上は計れませんよ。それに、その場合も一人一人に対する感情的なものは一切考へるべきです。何人かな差別をつけるチームの信用は落ち、そのフォーテの行動が知らず知らずのうちには部員に不和を生ずるものです。そうばつたがもうフォーテ資格はありませんよ。スポーツの世界は何と云つても実力が第一です。実力のない者が実力があるものに勝るとは考へられません。実力あれば新人といえどもどん／＼使ふ方が好いと思ひます。スポーツの世界に「いいい」が存するならば、フォーテとしては墮落です。私は全量を「いいい」して失敗したのです。墮落の王者はもうも余り無きやありませんよ。

新人に於いてどう考へるか？ と仰言るのですか。新人は練習の下が持ちで、これがななかつたが部は成立ちませんね。練習の時にはとにかくレギュラーの子を対照にしてからですが、これは大きな誤りです。部はその代だけ終るものではなく何代も続くものなのです。この養成を怠れば大変です。實際の練習でも、完全にレギュラーと二軍に区別せずに、出来るだけ混せてやせる試合を作る方が良く行いでせうかね。勿論、余り足手まといになるのは困りますが、少しでもやれる様に打つた方、混せる方が良いですね。五村五等の時は、レギュラー三人に新人二人と本気な比率でどん／＼やうせると、攻撃に呼吸を合はせる様になり、新人が三十人も四十人も部になるとレギュラーと二軍新

人を完全に区別しないと練習にならないと思ひますが、少数の場合
は許さるだけ新人のレベルを向上させるのに努力すべきだと見
做す事があります。彼は三肌までどんく新人をレギュラーに混ぜてやら
せましたか、その方針は誤用して来たと思ひます。新人は新人選
だけでレギュラーに就すると、一寸失敗しても新人だから仕方がない
と思つて責任を感じないものですが、レギュラーの中に入ると、失敗
しない様に必死でやるから意外進歩が早いものです。自信をもたせ
ることで、アドバイスも満足させてやむべきでせうね。ま、おリッ
はレギュラーになつてからいつと上手になつたいと云ふことを聞きた
すが、その事は、この辺のことと明確にしてゐるにはないでせうが、
新人養成を怠れると、その癖は口の弁舌もてしまふでせうね。
試合にもどしく出場させて、試合を通じて成長を促すことは大印
です。レギュラーがいくつあるか、その中でもいいのをはりきする
のです。だがレギュラーは、自分の能力を、その中でも一つ一つにつ
いても責任を背負はねばなりません。その責任は、自分が負つて行く
水とばせられて良いのだ、と云ふことと、それよりも、その新人が
金額に少しも負けぬように、それはコレかとよく練習するべきものだ
と云うね。い、とか何とか結果を本にする間に相当、時間割もたつたが
しいです。あのままだよ、それといたして、その水は次の試合にしま
せよ、私がもしもそれと相違点なくなられたらどうですか、と云うもな
い、これからです。強くなるのは、そのうちに必勝に気が生え、
練習をたくさんやります。あつは、では御堂下さい。

昭和廿六年
東京大学新リーグ春季リーグ戦

本院大学 57 - 36 東京大学大

本院大学 59 - 51 日体大

本院大学 52 - 40 成城大

本院大学 64 - 65 横浜国立大

本院大学 53 - 74 青学大

関東大学新リーグ秋季リーグ戦

本院大学 78 - 74 日体大 一回戦

本院大学 71 - 51 日体大 二回戦

本院大学 57 - 53 青学大 一回戦

本院大学 64 - 60 青学大 二回戦

本院大学 30 - 54 青学大 決勝戦

本院大学 48 - 60 横浜国立大 一回戦

本院大学 59 - 67 横浜国立大 二回戦

秋季リーグチーム及び個人戦績

氏名	出場時間	野投率	自由投率	得点	反則	得点率
池田	353	0.271	0.554	121	20	0.346
及野	343	0.391	0.553	139	27	0.406
坂口	335	0.426	0.606	120	35	0.358
森	260	0.513	0.619	58	27	0.223
敏	307	0.519	0.509	96	36	0.310
立原	101	0.519	0.519	7	10	0.069
野原	53	0.519	0.519	4	7	0.055
小林	16	0.519	0.519	2	0	0.125
大塚	12	0.519	0.519	0	1	0.000
チーム		0.519	0.519	497	163	

本学大学 48
 145 明学大 二回戦
 明学大 一回戦

チーム戦績表 511

本学大学	41	1	28	東大
本学大学	41	1	57	京大
本学大学	44	1	33	東大
本学大学	57	1	73	京大
本学大学	58	1	67	京大
本学大学	35	1	42	全成
本学大学	41	1	33	東大
本学大学	59	1	42	明学大
本学大学	42	1	61	成城大
本学大学	76	1	37	本学大
本学大学	41	1	66	教大
本学大学	41	1	79	明学大
本学大学	45	1	77	東大
本学大学	47	1	47	武蔵大
本学大学	47	1	43	成城大

編者記
 第三号こそはと強切つていたのに、
 どうも思はずに出るとはなす。落
 胆もしやし訳りなくも思つてゐる。
 印刷などの連絡の手違ひから、暮も
 押しつまつた二十九日に慌て、刷つ
 たのだから良いものも出来るわけは
 ないのだが……
 今度のは05号の原稿が来ず、
 大部分が理校の原稿になつて了つた
 三号は成可く05の原稿を多く集めた
 たいと思ふ。又内容も多方面に亘つ
 て行き度著り多く、せい沢な理想
 には持つてゐる。今後一層の切磋
 力をお願ひしたい。
 河村記

全學院筆塚クウ下部報才ニ号
發行者 全學院筆塚クウ下
編輯者 河村九郎哉
印刷者 小林 公太
印刷日 昭和六年十二月廿九日